賀茂別雷神社修理方による営繕活動

HOW DID SYURIKATA BUILD AND REPAIR BUILDINGS AT KAMOWAKEIKAZUCHI SHRINE

中西大輔*

Daisuke NAKANISHI

This paper reports how Construction Organization built or repaired buildings at Kamowakeikazuchi Shrine. “Syurikata” was known as Construction Organization at Kamowakeikazuchi Shrine. But details were unclear. It was not yet reported what process was used in building or repairing buildings at Kamowakeikazuchi Shrine.

Based on old diaries kept at Kamowakeikazuchi Shrine, Syurikata acted to build or repair buildings in the following three processes:

1. Syurikata received a request from Kamowakeikazuchi Shrine
2. Syurikata acted
3. Syurikata reported a result to Kamowakeikazuchi Shrine

These processes applied to both inspection and construction at Kamowakeikazuchi Shrine.

Keywords: *Kamowakeikazuchi Shrine, Syurikata, Construction Organization, Building and Repairs*

賀茂別雷神社, 修理方, 造営組織, 新造・修理

1. はじめに

1.1. 研究の背景

賀茂別雷神社には歴史的価値を評価されている多くの建築物がある。本殿・権殿と呼ばれる社殿は昭和28年、国宝に指定され、平成6年には世界文化遺産にも登録された。このほか昭和28年には境内・外の摂末社および舎屋が計36棟重要文化財に指定されている。

これらの建築物は幾度にもわたる新造・修理を経て保存されてきた。江戸時代だけをみても幕府による造営が8度（寛永・延宝・正徳・寛保・安永・享和・天保・文久）行なわれている。寛永度の造営では境内にある多くの建築物が新造された。その後、本殿・権殿・貴布祢奥社では延宝度以降も毎回新造が行なわれ、文久度に新造された社殿が現存している。一方、そのほかの社殿・舎屋では、延宝度以降は修理が行なわれ、寛永度新造の社殿・舎屋が現存している。

それにもかかわらず、誰が賀茂別雷神社で新造・修理を行なったかということについては、あまり知られていない。中世以前に賀茂別雷神社で建築工匠を務めた林家が近世に大徳寺の棟梁を務めたことが知られてはいる^{注1)}。しかし、林家に伝わる木割書と現在の社殿を比較すると異なる部分が多い。本殿の木割値は現在の本殿のものよりも嘉元度の本殿のものにより近いことが指摘されている^{注2)}。また、摂社のうち大田社、奈良社、沢田社、氏神社の実測値からは木割書とは異なる木割システムが想定された^{注3)}。そのため、社殿・舎

屋の技術的系譜は不明な部分が多いといえる。

この理由として史料の調査が進んでいなかったことが挙げられる。賀茂別雷神社に残る史料（以下、賀茂別雷神社文書）は膨大であり、ながらく未整理の状態にあった^{注4)}。そのため、賀茂別雷神社文書の文献調査を有効に行なうことができなかったのである。

それが近年、賀茂別雷神社文書的全貌が明らかとなり、史料調査が比較的容易となった。全貌が明らかとなった過程は次のようなものである：平成9年、賀茂別雷神社文書の整理事業が開始された。平成15年、整理事業の成果が『賀茂別雷神社文書目録』^{注5)}としてまとめられた。そして平成18年、賀茂別雷神社文書はその価値を評価され、重要文化財に指定された。

その結果、賀茂別雷神社の歴史について多くのことが明らかになった^{注6)}。これをうけて、筆者も江戸時代8度の造営、社殿の木割、建築工匠の組織について、調査を行なってきた。そして、賀茂別雷神社の建築工匠は賀茂別雷神社の支配下に入り活動を行なっていたことなどがわかった^{注7)}。

この結果から、賀茂別雷神社で新造・修理の意志決定を行なったものが存在したと考えられる。最終的には賀茂別雷神社の神官たちによって評議が行なわれ新造・修理が決定したことは容易にわかる。しかし、新造や修理を差配していた組織の実態は不明である。賀茂別雷神社の建築工匠は賀茂別雷神社の支配下にあったからである。

* 日本学術振興会 特別研究員 PD
(京都府立大学大学院 生命環境科学研究科)

Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science

支配下にある建築工匠たちは、自由に新造や修理を行なうことを許されていなかった。賀茂別雷神社の命を受けて新造や修理を行なったのである。新造や修理にあたり賀茂別雷神社の意向を仰がねばならなかったのである。現在みる賀茂別雷神社の建築物が江戸時代どのようにして維持されてきたか知るには、賀茂別雷神社の新造・修理における指示系統を明らかにしなければならない。

1.2. 賀茂別雷神社の造営組織に関する既往の研究と問題点

これまで、賀茂別雷神社の造営に関する組織（以下、造営組織^{注9)}）として、作所奉行、社頭月行事、修理方というものが知られてきた。作所奉行については、造営に関する記事や、算用状に記される支払先などから、

- ・正大工以下の番匠を指揮すべき立場にあったらしい
- ・職務の中心は、作所奉行という名称からしても殿舎等の作事にあったことは間違いなからう

などと指摘されている^{注9)}。社頭月行事については、天文20年（1551）から慶長18年（1613）に算用状を作成していること、天正18年（1590）の片岡社造営に要する費用を請け取っていることが明らかにされ、

- ・社頭月行事が社殿造営の際に一定の役割を担っていたことは明らかである
- ・主たる性格は月番の社頭管轄係であったらう

との見解が述べられている^{注10)}。修理方については、3人で構成されていたことが示され、

- ・神殿以下の諸建造及び建造物の修繕を掌る

と紹介されている^{注11)}。

しかし、作所奉行、社頭月行事、修理方がいわゆる造営組織として機能していたかどうかは不明のままである。社頭月行事は作事に必要な材料や建築工匠などに対する支払いを記録した算用状を作成しているため、造営組織である可能性が高い。しかし、作所奉行と社頭月奉行については「一定の役割」などともあるように職務の全貌が明らかになってはいない。一方、修理方についても『賀茂別雷神社由緒略記』にもとづき「修繕を掌る」とされていることから、造営組織である可能性が高い。とくに修理方については、明治維新直前の記録をもとにしているため、その存在が確実な組織とみなすことができる。しかし、上記の記述からはより詳しい職務内容を知ることとはできない。これらは勘定や由緒に特化した史料の研究から明らかになったことであるためと考えられる。

1.3. 研究の目的と方法

そこで本稿では、修理方が賀茂別雷神社において建築物の新造および維持管理をするにあたりどのような職務を担っていたのかを当時の文献に基づいて具体的に明らかにする。修理方の職務を建築物の④管理と⑤新造・修理にわけてみていくことにする。修理方は賀茂別雷神社内組織であるため、①賀茂別雷神社から修理方への行動、②修理方の建築物・建築工匠に対する行動、③修理方から賀茂別雷神社への行動、という3つの手順が考えられる。

そのために本稿では、賀茂別雷神社に伝わる賀茂別雷神社文書、とくに『日次記』を用いる。以下、『日次記』を引用する場合はとくに断らず、必要に応じて年月日を記す。『日次記』は『賀茂別雷神社文書目録』のなかで次のような性質が明らかにされている^{注12)}：「氏人惣中の公的な日記」である。作者は、賀茂別雷神社において毎年圖で選出される氏人（物書、執筆）である。構成は1年分の内容を

1冊にまとめることを基本としているが、時代が下るにつれ1年分の内容を数冊に分けて作成されている場合もある^{注13)}。そして、「江戸時代の上賀茂社の基礎史料となるものである」と評価されている。

扱う時代は元禄5年（1692）から享保20年（1735）までとする。上限を元禄5年としたのは、この年用務繁多を理由に修理方が発足したからである（9月27日条）。下限を享保20年としたのは、修理方の職務・権限は、発足後付け足されていき、享保年間までをひとつのまとまりと捉えられるからである^{注14)}。さらに、修理方発足前の組織との比較をするためにも、組織の発足から完成するまでに限ったほうが得策であると考えたからである。

なお、修理方を指す名称は複数ある。『日次記』のなかでは「修理方」のほかに「修理奉行（衆）」、「修理方奉行（衆）」なども呼ばれている。本稿では修理方として統一する。

2. 修理方の職務

2.1. 境内にある建築物の管理

a. 建築物の状況を調査するよう依頼される

少なくとも江戸時代の賀茂別雷神社では建築物の状況を把握するために見分が行なわれていた。毎年、境内全体の建築物を見分する機会が設けられていた。また、建築物が破損した時には随時見分が行なわれた。どちらの場合にも修理方が参加している^{注15)}。

全体の見分は破損の有無によらず定期的に行なわれているが、臨時の見分には寄合から修理方へ見分が依頼される。宝永元年（1704）の『日次記』には、

河原町源三郎家ノ事、近々修補可被加哉ノ事、依之評之上、修理方有見分、積之上、可有披露極ル（1月22日条）

とある。このことから、

1. 寄合で取り上げられる^{注16)}
2. 修理方に見分が命じられる^{注17)}
3. 修理方に建築工匠などから見積りをとるよう命じられる^{注18)}
4. 寄合に新造・修理案と見積りを提出する^{注19)}

という手続きを経て新造・修理が決定されると考えられる。場合によっては、寄合後に見分が行なわれてから修理方に要請される場合もある（宝永5年1月27日条など）。

ただし、手続きは省略される場合もある。あらかじめ見分が行なわれたときには修理方に見分の要請がされない場合もあった。例えば宝永5年の修理では、

廿二日、神殿・舎屋破損ニ付、寄会已後、惣検分、則御修理之所々被書付、執筆統之、各御相談、修理方へ可被仰渡候事（1月27日条）

とあり、「2. 修理方に見分が命じられる」は省略されている。また、軽度の破損である場合や簡単な処置で済む場合にも修理方に見分の要請がされないことがあった。例えば享保8年、大殿・権殿下に動物が入り込んだときのことである。初め、掃除講中へ処理を命じたが、

当分繕候分ニ而者、難成候間、大工等江も被仰付、縁ノ下等、御吟味候而、被繕間舗哉ノ事（3月22日条）

という知らせをうけた^{注20)}。これに対して賀茂別雷神社は「御修理方へ可被附」という決定を下している。このように、「当分繕」というような応急処置には、修理方は関わらないこともあるが、建築工匠などが必要な「繕」には修理方が関与していたことがわかる。

b. 新造・修理の計画を立案する

これらの見分によって修理が必要と判断された建築物は修理方によってリストアップされる。元禄8年には、修理方が社殿・舎屋の破損状況について見分を行ない、翌日にリストが提出されている（2月27日条）^{注21)}。さらに、破損状況が分類されることもある。享保2年の『日次記』には、前日に行なわれた全体の見分に対しての評決がある（1月22日条）。そのなかに「大破・小破積り可被申付」とあるように、破損状況を「大破」、「小破」に分けて見積りを行なうよう指示されている。修理の優先順位を決めるためである^{注22)}。

なお、リストには見分前に破損の報告があったもの以外が含まれることもある。このような事例は享保5年に行なわれた貴布祢での見分報告などにみられる。享保5年、修理方によって正大工が貴布祢へ見分に派遣された。そして見分後に正大工から「其外御屋根三所斗少々損候」という報告が修理方にあがっている（6月11日条）。

次に、リストアップされた工事内容について、修理方は建築工匠などに見積りを指示する。見積りには特定の建築工匠などに直接指示する方法、複数の建築工匠などに依頼する方法がある。正大工に直接指示する場合として、宝永5年には「御修理方奉行中承二而」正大工に見積りが命じられることが決定している（1月27日条）^{注23)}。また正徳4年（1714）には修理方から会所を通して議題に上がった鍛冶の選定問題について「大工（名前略）取次ノ鍛冶、心安キ様ニ被思召候間、大工と宜御相談ノ上、可被仰付事」として鍛冶を選んでいる（11月2日条）^{注24)}。複数の建築工匠などに依頼する場合として正徳3年には、

修理方衆より東小屋ノ普請、大工共へ被申付候事、重而惣大工ニ可被仰付事（閏5月2日条）

というものがある。ここでは入札と明記されていないが、5日後の『日次記』で「入札開ノ事」として結果が記されている（閏5月7日条）。同様に、元禄6年に行なわれた材木小屋の屋根葺替え工事については2人の瓦師へ見積りが依頼され、見積りの結果を修理方が寄合で報告している（3月23日条）^{注25)}。

c. 新造・修理案を提出する

こうして作成された社殿・舎屋に関する新造・修理の案を、修理方が賀茂別雷神社の寄合に提出する。提出の状況は、

- ・修理奉行中より披露、方々玉垣柱根継并井垣ノ根・燈籠木根継等仕候由ノ事（元禄6年5月8日条）
- ・今日、修理職奉行中より貴布祢社修復窺帳被認、執筆書之（元禄11年6月15日条）

などとなる。なお、リストのほかに絵図が提出されている場合がある。例えば正徳4年の評議所作事では、「評議所ノ普請ノ絵図」3枚と門の絵図が提出されている（2月16日条、10月12日条）。

2.2. 境内にある建築物の新造・修理

d. 新造・修理案について賀茂別雷神社から許可・指示をうける

新造・修理の方法については寄合の意見が重視された。江戸時代の賀茂別雷神社では寄合によって意思決定を行なっていたからである。『日次記』の調査から、賀茂別雷神社の意志決定を行なう寄合には立会寄合、小寄合があることが明らかにされている^{注26)}。それによれば、立会寄合は賀茂別雷神社における最高の評議機関である。この立会寄合は社員21人と、六役6人を含む氏人21人で行なわれる。開催日は基本的に毎月2日、7日、12日、17日、22日、27日と定められている^{注27)}。小寄合は立会寄合を規模・内容ともに簡単にしたも

のである。この小寄合は神主・月奉行・六役で行なわれる。

そのため、修理方から寄合へ問い合わせが行なわれる場合がある。元禄6年の『日次記』には、

新造ノ蔵ノ前ニ米斗場ノ底付候へハ、言ノ外蔵ヲ高ク拵申せねハ成不申候間、御座敷ノ東ノ方へ底ヲ付、斗場ニ可被成敷ノ事（8月9日条）

とある。これに対して賀茂別雷神社が最終決定を下している^{注28)}。また宝永6年には、風折れの樹木（杉）を保管するため木屋に底をつけることが修理方から提案されている。当初、賀茂別雷神社からは材木を保管することのみが依頼されていた。しかし、その場所がなかったことにより、底をつけることになったのである。そして、賀茂別雷神社に見分を依頼している（5月16日条）。このほか、新造・修理の仕様について複数の案が建築工匠などから提案された場合も修理方が寄合にかけている。例えば享保5年、貴布祢奥社の屋根^{注29)}で雨漏りがあった。そこで、修理方が正大工を貴布祢に派遣し見分させた。その結果正大工が提案した修理方法は2つあった：銅板で補修する方法と打覆いを設ける方法である（6月11日条）。これを受けて賀茂別雷神社で修理方針が決定している。宝永7年には、修理のための見分が行なわれたあとに正徳度造営が決定している。このときは修理方から賀茂別雷神社に、

先頃被相窺候御修理ノ義、先可被相止候哉、但被窺相済候間、屋ねナト大破ノ所可被仰付哉（3月28日条）

という問い合わせが寄合の席で行なわれている^{注30)}。

また、寄合が修理方法を決定する場合もある。享保元年、修理方は能舞台の屋根補修を「油紙ニ而積り吟味被申付」というように命じられた。見積りを提出したところ、次のような決定が下った：

大分之義ニ而、其上近年之内、又損し可申、先当年者損し破レ漏候処、^{（葺）}洩せ^{（葺）}ンニ而張り被置、様子可被相見旨、修理方中へ入魂可有之候事（6月12日条）

新造や修理の費用も寄合の審議を通して決定していた。見積りの額が高ければ、賀茂別雷神社によってより低額の見積りを出すように指示される場合もある。元禄6年には、正大工から見積りを受け取った賀茂別雷神社が、「今少下直ニ仕候様ニ奉行衆より入魂可有之」という決定を下し、修理方を通して見積額の引き下げを指示している（8月15日条）^{注31)}。正徳2年には、「道具木ヤ」を新造するにあたり、見積り額にさしたる違いがないことから、最安値をつけた建築工匠の見積り額で役大工の「申合」によって行なうことが決定している（2月22日条）。また正徳4年には、

修理方衆被申候ハ、評議所御門ノ鉄物并くらノ鉄物書付、鍛冶より何返も上候間、何レニ可被成候哉ノ事（11月2日条）

とあるように、修理方は見積りの結果を賀茂別雷神社に報告し、決定をまっていることがわかる。修理方は賀茂別雷神社と鍛冶との間にたち、交渉を行なっていたといえることができる。

修理を急がなければならないときには寄合が開かれるまで待てないこともある。そのときは、会所に報告している例がある：

十五日晩景ニ御修理奉行中より会所へ酒殿屋ね之義、見苦敷候間、暫クも早ク繕可然旨届有之、然ル上者、小寄合相催し、相談候者、今日ニ者出来も申間敷候間、奉行中并職中、大工・屋ねや等召連、見分之上、被繕可然、相談ニ而、則被申付候事（享保2年1月18日条）

ここでは修理が遅れてしまうことを理由に、小寄合を開かず、見分のうえ、修理を行なうことが決定している。なお引用文中の「酒殿屋ね之義」とは、15日に酒殿の煙り出し近くで火事が起こったことによるものである（1月17日条）。

修理方が小寄合を開く例もある。享保4年の『日次記』に、
御能舞台、今日之雨ニ漏候ニ付、御能両日雨降ニ而ハ如何ニ付、
為御相談、御修理奉行衆より小寄会被相催候事（6月28日条）
という記事がある。能舞台は6月晦日と7月1日に行なわれる御戸代会神事で必要となる。次に寄合が開かれるのは7月2日頃である。そのため、寄合をまつことができず、修理方が小寄合を開いていると考えられる。先の貴布祢奥社屋根修理の場合も2つの修理方法のうちどちらにするか、修理方は小寄合を開き、賀茂別雷神社に決断を仰いでいる（享保5年6月22日条）。

このような場合、新造・修理案を提出せずに修理に取り掛かることもある。①単純な修理で済むとき、②時間がなく応急処置を行なうとき、がそうである。①の例を挙げると、享保5年の『日次記』に、
氏神井垣破損ニ付、月番・御修理方・六役等検分以後、小寄合、出席、神主・月番・六役等也、会所清遠（7月9日条）
と記されている。このときは修理方のリストアップや修理案が提出されていない。破損箇所が1つであるため、リストは必要ではなかったと考えられる^{注32)}。また、井垣の修理は壊れた箇所を直すだけの単純なものであると思われる。そのため、修理案についても必要がなかったと考えられる^{注33)}。②の例を挙げると、享保9年の『日次記』に、
其通難被指置義ニ付、御修理奉行衆ヲ被招、明日早天ニ、正大工被召連、様子被窺、繕可被申付、若天井も貫候ハハ、其上ニ而相談可有之旨也（12月13日条）

と記されている。これは貴布祢の梅宮社で屋根に破損が見つかったという届けがあったことをうけての決議である。賀茂別雷神社では放置しておくことができず、翌朝修理方と正大工を派遣し、「繕」わせるよう命じている。天井にも破損があるようなら、さらなる対処が必要であるため、「繕」のうえ要相談というのが決議の内容である。

e. 新造・修理を差配する

寄合の結果、新造・修理が決定したものについては、修理方を通して建築工匠などに新造・修理の指令が下る^{注34)}。例えば享保3年、棚尾社の「御鎖ノ座金物」が「抜ケ」た。そして、「修理方より飴屋ヲ呼ニ被遣、其金物ヲ被調、正大工ニ可被仰付事」という決定が下っている（7月17日条）。このことから、棚尾社の金物修理にあたり、飾屋と直接交渉するのは修理方であったことがわかる。なお、後半の「正大工ニ可被仰付事」は寄合から指示したということか、修理方から指示したということか不明瞭である。享保2年には、

先日、修理方ハ被仰渡候間、追付大工参り可申候、茶釜ノ儀ハ職中より被調可被遣トテ相被申渡候（3月17日条）⁽²⁾

とある。これは、貴布祢の詰番から貴布祢での修理を急いでくれるようにという要請をうけたときの裁決である。修理の要請をうけたときには「(修理箇所略)此両所、大工ニ被申付候事」と記されている（2月22日条）。そのため、建築工匠を決定するのは寄合であるかもしれないが、実際に指令を下すのは修理方によると考えられる。

作事の間、修理方は現場の差配を行なう。差配の対象は新造・修理両面にわたっている。以下では修理の例を多く引用しているが、道具木屋などで新造の例もみられる（止徳2年2月22日条）^{注35)}。

現場の状況をみて修理方は修理方針の決定や変更を寄合に提言する。宝永6年には、

(略)詰番(名前略)被相願候筈之事、竹ニ而可仕旨被仰遣候へ共、(名前略)兩人見分申候処、此度木ヲ仕ニ付、当分ノ儀之様ニ相聞へ候へ共、左様之事ニ而無之、只今迄ノ筈ニテ被取候水、事ノ外味悪敷、其上人入込候へ者、不浄ノ□も有之、毎朝御神供ヲモ被備進候処、右之通気之毒、彼是以被相願候処、尤ニ相見へ申候、迺ノ儀ニ、木ニテ被仰付被遣候ハハ、可然ニ存候へ共、新ニ式十間程拵申事ニ御座候故、了簡難成、帰り申候之旨也(略)（6月8日条）⁽³⁾

とある。このように、貴布祢での算修理にあたり、当初賀茂別雷神社の方針では新しい算を竹で作ることになっていた。しかし、修理方が実際に見分を行ない使用者に実情を尋ねてみると、竹よりも木で作るほうが適していることが判明した。修理方は勝手に決めることができないとして、ほかの修理が完了後、上賀茂に戻り賀茂別雷神社の意向をうかがっている。このほか正徳4年には、境内に新しく建てる文庫に社殿や鳥居の古材を用いることを修理方が提案し採用されている（9月27日条）^{注36)}。

見分によって立てられた新造・修理の期間は変更されることもある。享保5年には貴布祢での修理にあたり「一兩日中も逗留可有之」という書状が賀茂別雷神社に送られてきている（7月22日条）。修理箇所が予想以上に多かったためであるという。一方、同年に行なわれた貴布祢の牛一社における修理は当初の予定と異なり1日で済んでいる（12月7日条）^{注37)}。破損が予想していたよりも軽度であったためであるという。また、新造・修理中に新たな修理箇所が見つかる場合もあった。例えば享保7年、予定していた作事がおおかた終了し、上賀茂に戻ってきた修理方から未修理部分および新たな修理箇所について報告があった。賀茂別雷神社は「御修理奉行中被申合、重而被上、可被申付旨也」として作事の規模を拡大、期間を延長している（10月27日条）。

遠所での作事にあたり、現場と賀茂別雷神社との間で連絡が必要などときには、現場に詰めている修理方から上賀茂に残っている修理方に宛てて手紙で伝えられる。例えば、享保10年には「御修理奉行(名前略)、此間、御用ニ付、キ布祢へ被居候而、相役(名前略)方へ手紙到来之事」として、修理に用いるための樹木伐採に関する報告が行なわれている（6月3日条）。

さらに、享保10年の『日次記』からは御戸代会能見物所も修理方が設置していたことがわかる：

御戸代会能見物所、近年、御修理方より被構之、社用場多候間、向後三ヶ所ニ被究、床二脚ツハ敷候様ニ可被申付ニ決（6月22日条）

「近年」とあることから、当時は修理方の職務の1つとして定着していたことがわかる。

f. 完成状況を報告する

作事が完成すると、再び寄合に報告される。簡単なものとしては元禄5年の『日次記』に、

修理奉行中より被申候ニハ、方々井垣ノ根継并玉垣ノ柱ノ根継等、此比大工、三日かゝり仕舞之事（12月8日条）

とあるように、口頭で伝えられているらしいものもある。また元禄6年の『日次記』「貴布祢社修覆之覚」（5月17日条）のなかに、

一、牛一社打覆之事

一、本社西東ノ玉垣中ノ柱少根継之事

但、扣根継ニメ少斜ニ根継ヲ可仕、東ノ方ハ内より□
外より柱可立也

一、北ノ門扣柱式本、西東共ニ根継シテ門傾ヲ可直事

一、南ノ門傾直シ、柱ノユカミヲ直シ、門ノ扣ヲ可打事

というように、詳しい内容を記した書面が提出されている場合もある。

また、作事の途中で経過が報告される場合もある。いま述べた元禄6年の貴布祢修理でも、つづけて「重而修覆可有之分左記」として、

一、同所権殿西ノ方ノ大岩土際より三尺程上ヲ可切取事

但、此末ニヤ子フキ参候時分、石切呼寄せ検分可申付也

一、同所不動堂西ノ方縁ノツカ木可取替事、四方ノ縁直ノ事

但、次ノ普請之時、修覆可有之也

(略)

一、同所湯殿ノ事

此修理之義者根太ヲ張敷、又ハ所ヲ替か、猶可請衆評事などと、修理の完了報告とともに、積み残しとなった個所が報告され、一部は仕様について賀茂別雷神社の意向をうかがっている（5月17日条）。宝永6年の貴布祢における作事でも、賀茂別雷神社の意向をうかがうため上賀茂に戻った際にはかの修理経過を報告していたことは先にみた（6月8日条）。

さらに新造・修理の前後に社殿で遷宮が行なわれる場合には、修理方にも関与している。例えば、元禄15年の藤木社遷宮への参加（3月11日条）^{注38)}、宝永6年の「二ノ里御社」の権地整備（2月22日条「権地可被相構」）^{注39)} などがある。

3. おわりに

以上、賀茂別雷神社の造営組織、修理方がどのように営繕活動を行っていたかをみた。そして、修理方の行なった活動の流れを次のように復原した（図1）。

図1 修理方による営繕活動の流れ

この活動の流れから、江戸時代の賀茂別雷神社における修理方による活動が記録のないものも含め把握できることになる。本稿で扱った事例はそれぞれ関連のない異なる工事のものである。本論中でも述べたように簡単な工事の場合や急を要する工事の場合など復原した流れの一部は省略されたと考えられるものもある^{注40)}。しかし賀茂別雷神社では寄合による合議制のもとで運営が行なわれていたこ

とを考えると、復原した活動はすべて行なわれることが基本であったと考えられる。そのため互いに関連しない個々の事例を網羅することで、省略された部分も含め修理方が行ないうる活動の流れを復原することが可能となる。個々の事例は、この復原された流れの範囲内で行なわれることになる。

さらに造営組織である修理方の特徴として、

- ・祭礼にあたり境内の設営を行なう
- ・神事である遷宮へ参加する

の2つが挙げられた。遷宮への参加は神官としてではなく修理方として参加している。これらの職務は修理方が神社内部の組織であることによるものである。

なお本稿では、修理方と幕府による造営との関係については触れなかった。正徳度の造営をみると修理方は、

- ・中井家が事前に行なう見分につき従う（宝永6年10月5日条）
- ・役大工の造営参加について賀茂別雷神社から中井家へ願いをあげるにあたり役をつとめる（宝永7年4月18日条）
- ・「普請場」に出頭し、中井家の奉行から摂社と細殿を楨皮葺きにするという通達をうけとる（正徳元年1月27日条）

などの役割を担っている^{注41)}。修理方は日常の新造・修理に限らず営繕活動を行なっていたと考えられる。

注

注1) 川上貢・永井規男「大徳寺の建築工について」『日本建築学会論文報告集』第89号、昭和38年9月、伏見唯「林家木割書について（1）—林家の由緒—」『2006年度日本建築学会関東支部研究報告集』2007年2月、同「林家木割書について（2）—嘉元期の賀茂別雷神社本殿と木割「賀茂様之三間社」の比較—」『2006年度日本建築学会関東支部研究報告集』2007年2月

注2) 前掲「林家木割書について（2）—嘉元期の賀茂別雷神社本殿と木割「賀茂様之三間社」の比較—」

注3) 中西大輔・日向進「近世賀茂別雷神社の摂社にみられる木割について」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第49号、2009年6月

注4) 整理事業の結果、賀茂別雷神社文書は約14,000点あることがわかった。

注5) 『賀茂別雷神社文書目録』京都府教育委員会、平成15年3月

注6) 大山喬平監修、石川登志雄・宇野日出生・地主智彦編『上賀茂のもり・やしろ・まつり』思文閣出版、2006年6月

注7) 中西大輔・日向進「賀茂別雷神社の役大工と営業権について」『日本建築学会計画系論文集』第77巻第673号、2012年3月

注8) 本稿でいう造営組織は、浜島一成氏によって「寺社内造営組織」と命名された組織であり、「寺社内部における工事管理組織」、「寺社側が自前で組織した営繕組織」のことである（浜島一成『中世日本建築工匠史』相模書房、平成18年9月）。

注9) 須磨千穎「中世における賀茂別雷神社氏人の惣について（5）」南山大学経済学会『南山経済研究』第9巻第3号、1995年2月

注10) 須磨千穎「中世における賀茂別雷神社氏人の惣について（11）」南山大学経済学会『南山経済研究』第12巻第1号、1997年6月

注11) 建内光儀『上賀茂神社』（学生社、2003年12月）。修理方の人数・職務が「簡単に」として紹介されている。同書によれば、同書の記載内容は『賀茂別雷神社由緒略記』によるものであり、「維新直前の職制」を示しているという。

注12) 前掲『賀茂別雷神社文書目録』

注13) 1冊の分量は「数百丁から五百丁」（前掲『賀茂別雷神社文書目録』）。

注14) 詳しくは本論および次稿以降でみていくことにするが、修理方は享保5年頃までに営繕組織として新造、修理、資金管理、材料管理の機能をもつようになったと考えられる。なお、本稿で扱う範囲外である元文年間以降の『日次記』を調査した結果、元文・寛保年間に対象に入れても本稿と同様の結果が得られると考えられた。造営組織以外の変遷を考えても、寛保年間以降、修理方の立場に変化は生じにくいと考えられる。例えば、建築工匠の組織や造営時の儀式も寛保度の造営以降は先例通りに行なわれている。

注15) 全体の見分には毎回、修理方だけでなく神主、月奉行、六役、正大工が参加している。ただし、距離のある氏神社境内の建築物は修理方のみが見分に向つていたり、正人工のみが派遣されていたりする場合もある。

注 16) またこの場合、修理方が寄合へ報告をあげる場合もあった。『日次記』から例を挙げると、元禄 15 年 10 月 20 日条に、
修理奉行より及披露候へ、御園口制札ノ柱根くさり并十楽寺門南ノ方屏
ひち坪ぬけ、倒有之候由、早々罷可被越候由被申渡者也
というものがある。このほか享保元年 5 月 27 日条にも、貴布祢奥社の旧殿
および材木小屋の屋根が損じたことが成就院（寺家の 1 人で貴布祢で活動す
る）から修理方に報告されている。

注 17) このような臨時の見分にも修理方のほかに神主や月奉行、六役、正大工
が参加する場合があった。とくに大規模な見分の場合には神主と月奉行、六
役も参加し、さらに正大工が連れて行かれるものと思われる。また、正大工
のみを下見に派遣する例も見られる。例えば宝永 5 年には、貴布祢で行なわ
れる修理に向けて正大工を見分に派遣したことが修理方によって寄合で報告
されている（8 月 7 日条）。ほかに享保 5 年 6 月 11 日条など。

注 18) 見積りには建築工匠などが行なう見積りと修理方が行なう見積りがあ
ったようである。建築工匠などは新造・修理にあたり、基本的には与えられ
た条件に対して見積りを行なう。一方、修理方は新造・修理の条件を決定し、
それに必要な費用を見積っていると考えられる。修理方が行なう見積りに関
して、享保元年に修理方が提出した見積書について賀茂別雷神社から訂正を
求められたという話がある。修理方が初めに提出したものは「舞台小屋」屋
根の坪数を多めに見積もっていた。これについて賀茂別雷神社は屋根の坪数
はあとあとみるものであることを理由に、屋根の坪数は実際の数値を記入し、
別のところで高めの見積もりをするように、という決議が下したのであ
った（閏 2 月 27 日条）。

注 19) その後、再び寄合に修理方も出席のうえ相談が行なわれることもある。
享保 6 年には修理方から橋小屋の「積書」と「絵図」がさしだされたときに「来
ル廿二日、御修理奉行衆にも出席有之而、御相談可然之旨也」という評決が
下されている（8 月 17 日条）。このように、修理方との相談が必要と判断さ
れた場合には、次の寄合まで議題は保留されることがわかる。
また、元禄 10 年に行なわれた全体的見分では修理方が帳面を作成してい
るが不明である。すなわち元禄 10 年 2 月 14 日条：
今日社内修履惣検分有之（略）
社頭番所量五畳半表替（略）正・権之御垣之内、諸木引取事、掃除講中
へ申渡事（略）二鳥井左右井垣六本根継事、右帳面之通、記之

注 20) なお動物とはキツネであり、「不浄等持来候旨」が報告されている。

注 21) 全体的見分から新造・修理案が提出されるまでの期間は一定していない。
享保 3 年には、「御修理方より社内舎屋等迄御修履積帳被差出候事」とあり（3
月 2 日条）、見分から 1 月以上かかっている。享保 4 年には「社頭修復積り帳面」
が提出されている（1 月 27 日条）。同月の 11 日に見分が行なわれたとすれば、
2 週間ほど経っている。

なお本文に関連して、修理方から書付を差し出された賀茂別雷神社では「此
通ニ清書被成可被相窺ニ極ル」と、さらに清書が行なわれることが決定して
いる。元禄 8 年にも修理方による「修履ノ下帳」が清書のうえ「被窺」こと
になっている（7 月 27 日条）。

これは修理のリストが奉行所に提出されるものであったためであると考え
られる。しかし、必ずしも奉行所に提出されたわけではない。それについて、
公儀へ破損修理ノ義一屆仕置候而、混物修履可然存候、内々競馬前不得
已事、先ツ修履被致候様ニ入魂候⁽²¹⁾方、方々修理肝煎ノ御衆御苦勞千万ノ
事也、猶其内公儀へちらと被窺置可然ニ極ル（元禄 6 年 5 月 3 日条）
などとあるように、競馬会前など奉行所へ提出しては時間がかかるという
ようなときには先に修理が行なわれていたようである。また、『清茂県主
日記』（IV-A-49）正徳 3 年 7 月 19 日条によれば、「不及届、為一社早速加修
復置穩便之儀可然トテ」落雷で破損したものを修理することに決まっている。
もし奉行所から問い合わせがあれば、「少々ノ儀故社中ニ而加修復」えたと
答えることに決まっている。

注 22) 本文引用部分につづき、「其上ニ而今一応可有沙汰旨之事」とある。建
築物を大破したもの、小破にとどまっているものにかけて、修理の優先順位
を決定しようとしたことが考えられる。またこのころにはできるだけ早期に
補修を加えるという方針であったようである。同年、貴布祢の「社中ノ家、
殊外破損」の連絡があった。賀茂別雷神社では「大破成不申サキニ修理可有
之旨ニテ、修理奉行衆江被仰渡畢」という対応をしている（5 月 17 日条）。

注 23) 元禄 10 年にも、惣見分によって作成された「修履書付之帳」を 2 日後
に正大工が賀茂別雷神社で受け取っている（2 月 16 日条）。正大工に見積り
を命じたものと思われる。

注 24) なお、引用文中の「大工」は権棟梁である。また後述するように、この
作事に関して複数の鍛冶から見積りが上がっている。入札に近いといえる。

注 25) ほかに、修理方が鍛冶に見積りを依頼し、見積り結果を鍛冶から受け取
っている例がある（正徳 4 年 11 月 2 日条）。

注 26) 児玉幸多「賀茂別雷神社の集会制度」（『社会経済史学』第 8 巻第 3 号、
昭和 13 年 6 月）。このほか、老若寄合、三手寄合があることも明らかにされ
ている。老若寄合は立会寄合の決議について氏人が承・不承を決するために
開いたものである。三手寄合はいわゆる村落の若者仲間と同様のものである。
この三手寄合は若年層の氏人を中心に行なわれる。

注 27) これを恒例寄合あるいは式日寄合といい、元禄頃からの慣行である。そ
れ以前は毎月 2 日、12 日、22 日に行なわれていた。さらに遡って寛文頃
には 7 日または 10 日に 1 度行なわれるもので、開催日は一定していなかった
という。なお、このような恒例寄合のほか臨時に開催される臨時寄合があっ
たという（前掲「賀茂別雷神社の集会制度」）。

注 28) 正徳 4 年に行なわれた評議所の作事でも、修理方が一々質問し、賀茂別
雷神社が決定を下している（正徳 4 年 11 月 27 日条）。
・評議所ノ井、玄閑ノ南ノ方ニ可申付哉ノ事
・同所太鼓置所ノ事、今日者打候へとも、尚御差図可被下候事
・同所雪隠建所ノ事
・同所ノ張付可被仰付哉ノ事
これに対して、賀茂別雷神社からは「右之通ニ可被仰付旨ノ事」、「同所ノ南、
巽ノ方、宜可有旨ノ事」、「今迄ノ少弁所ノ所、上雪隠ト下ノト両口ニモ老所
ニ可被成候事」、「張付師、左兵衛ニ可被仰付旨ノ事」という決定が伝えら
れている。

注 29) 正確には箱棟と品板の間。

注 30) なおここでは、雨が漏る屋根について指板をすることが決定している。

注 31) なお、正大工が当初提出した見積り額は 265 匁であり、賀茂別雷神社の
要請を受けて再提出した見積り額は 230 匁であった（同 16 日条、18 日条）。

注 32) 同様の事例として、元禄 12 年 9 月 17 日条には「社頭雪隠ノ橋破損ニ付、
修理奉行衆被申付候事」と記されている。

注 33) このほか享保 3 年にも類例がみられる。山森社の燈籠が柱の腐朽により
転倒した。しかし、燈籠自体は無事であった。この報告に対し、賀茂別雷神
社は「修理方より宜可被成候事」という決定を下している（10 月 7 日条）。

注 34) 修理方と建築工匠の関係としては本稿で触れている雇用関係のほか、
・建築工匠に対する課役における工数の概算（宝永 6 年 4 月 27 日条）
・正大工からの飯料増額願いへの対処（宝永 5 年 8 月 7 日条）
などが挙げられる。

注 35) ただし、社殿の新造・修理はあまり行なわれない。これは社殿の修理は
基本的に行なわれなかったためである。必要なときには仮遷宮を行なったう
え修理が行なわれることもあるが、打覆いで補修することが多い。

注 36) ここで、修理方が賀茂別雷神社の意向をうかがっているのは、賀茂別
雷神社が寄合によって運営されていたためであると考えられる。修理方は小
寄合に加わっていることから、賀茂別雷神社の運営に一定の権限をもつて
いたことがわかる。また修理方には、今回対象とした範囲から外れるものの、
正称宜なども加わっており（元文 4 年（1739）2 月 19 日条）、身分の低い神
官によって構成されているわけではない。そのため、寄合という合議制によ
る運営方針のもとで修理方は活動していたと考えられる。なお、修理方を構
成する神官については修理方の任期とあわせて別稿を予定している。

注 37) 同 2 日条によれば、
御屋根打メケ天井ニ而留り余程之義ニ候得共、御内陣者御別条御座有間
敷杯と被存候旨被申也、依之御修理方被招、相談有之、先正大工検分ニ
被遣、其上ニ而可有沙汰ノ旨也
とある。樹木の枝が折れ、屋根が 1 尺四方程破損したという報告が詰番から
あったときの評決である。同 3 日条で修理方に正大工を連れて貴布祢へ向か
うようにという決定が下っている。ここでは修理方による見分と一緒に修理
が行なわれていることがわかる。

注 38) ほかに享保 4 年 5 月 9 日・10 日条など。

注 39) ほかに享保 4 年 5 月 9 日条「川尾社仮遷宮ニ付（略）権地被構置」など。

注 40) ここでいう省略には、本文中のように実際省略された場合のほかに、『日
次記』に記録することが省略された場合も考えられる。記録の省略があった
かどうかには『日次記』という史料の性質が関わってくる。新始めに関する
記述で考えておきたい。新始めは毎年 1 月 4 日に行なわれている。またこの
日は賀茂御祖神社参詣や謡始めも行なわれている。しかし、記事が一部省略
されている場合や、日付のほか何も記されていない場合（正徳 4 年 1 月 4 日
条など）もある。したがって、『日次記』は一部の記録が省略されるうるも
のであるといえる。これには『日次記』が下書きを経て作成されたものでは
あること、修理方の日次記というものもあることなど様々な要因が考えられる。

注 41) さらに安永度造営では、「大破」、「中破」、「小破」にわけるときに修理
方が関わっている。「(略) 神殿・舎屋等大中小破之儀御修理方并史頭等見分、
社頭へ出頭可有之旨ニ付直ニ出頭有之事（略）」（『当社貴布祢御修復神山御
検分一件仮日記』（III-21-15）安永 2 年 10 月 23 日条）。

（2012年12月10日原稿受理，2013年 4 月 8 日採用決定）